
ゲスな魔法の使い方

毛糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲスな魔法の使い方

【Nコード】

N2305S

【作者名】

毛糸

【あらすじ】

魔法は捻くれ者が生んだ嫌悪すべき超常現象だ。全ての人々は魔法を嫌い、魔法に頼り、さらに嫌う。負の感情が大きいほど、魔法の力は強くなる。そんな現代社会で魔法の参加自由フリースクールがあった。そのの特待生として卒業した二人の旅人。はたして待ちうけるのは「幸」か「不」か。全てが絡み合う物語が今、幕を開けた。

一話「魔法は捻くれ者が生み出したゲスな超常現象である」(前書き)

三人称初心者です。

「話「魔法は捻くれ者が生み出したゲスな超常現象である」

古人の中には、武道をする根性の無い人物がいた。それらは知恵を駆使し、魔法というものを作り出したという。上つ面は神から授かった素晴らしいモノだと言っているが、実際は捻くれ者が生み出したゲスな超常現象である。

道具と文字を絡み合わせ、声で唱えることで原子を高速で震わせ。そうすれば火というものが生まれる。後は気候や方角に合わせれば、火起こしの魔法という操作は完成なのだが……はたしてそれが実在するものか。きつと、全国で九割の人物は……否、中学二年生を除いて十割の人物がそれを否定するであろう。

だがしかし、考ええても見れば如何して火というものが生まれるのだろうか？それは、物質を高速で擦る事で摩擦の力が起こり、高熱が発生して着火する。というのが最も有名だ。そう考えれば、魔法と科学の火起こしは似ている。いや、用いる道具を省いて大雑把に言えば「同じ」だ。

しかしそんな理屈、世の中には通じないのだろうか、
「言葉は神である。神が生み出した、言葉である。水という言葉を作ったのは誰だか証明できない。この世で証明できないものは、言葉が多くを占めている。つまり神である言葉を駆使すれば、神から授かった魔法というモノも生み出せることに直結する。科学と考古学と魔法は、全て紙一重じゃ」

大きな芝のグラウンドで、一人の老人ガルフはそう言う。ボサボサの白髪を肩まで伸ばし、整形しても作れない長い鼻は顎まで垂れ下がっていて、持っている長い杖を合わせれば、まるで昔話に出てくる魔女のようだった。が、しかしながらガルフは男だ。

「お主らも知っているであろうが、この時代。五千年前のある日。境に魔法というものは存在しておる」

ガルフが語りかけているのは、彼の前で体操座りをしている複数

の「生徒」だ。時刻は十二時の四時間目。昼休みの前、ガルフの前で座っている生徒たちは「魔法の理論」を学んでいた。

生徒といっても、これは参加自由のリースクール。金さえ払えば誰でも魔法を学べる場所だ。勝手に家へ帰るのも自由だが、ほとんどの人はそれをせざるにまじめに授業に取り組んでいる。理由は直ぐに分かだろう。

「百聞は一見にしかず、ワシが手本をみせてやろう。確りと焼きつけよ」

そう言った老人ガルフは、杖を持っていない右の手を地面と平行になるよう掲げ、さらに握りこぶしから人差し指だけを力強く伸ばした。

「叶えたいことを負の感情にし、それを肥大させていく」

ガルフの発言と比例するかのように、彼の周りの芝から一際緑に輝く文字の円が浮かび上がる。これが俗に言う魔法陣というエフェクトである。

ガルフはそんな円を宥めすかしたりせず、ただ虚空一点を見つめている。その瞳はまるでコンマ単位の物質を凝視するかのよう定まっっていて、どこか光の無い目だった。

「魔法というものはふぬけたグズが生み出したもの！決して神の宝物などではない！神は自由を与えるものである故、このような差のつく現象は生み出さぬ！それを心得て使うがよい！負の感情以外を覚えるでないッ！」

一喝し、咆哮と同時に親指の第二関節を折り、その先を水平から空に変えた時。

「ルツクツ！！」

バチンッ！ ゴムが千切れるような快音と同時、一瞬にして風が止む。

刹那。

ゴオオオオオオオ！！ 一転。凄まじい轟音が唸った。突然にして空が裂け、一メートル程の亀裂が生まれる。生徒の半数がそれ

に驚愕の表情を浮かべ、また残りの半数は其れを経験しているような目で眺めていた。

轟音は止まないまま、亀裂はゴムになったかのように切り口が伸縮し始める。

「な……」

生徒の一人が驚きの声を漏らした時、

《ギユオオオオオオオオ！！》

歪な発狂と轟音のデュエットが亀裂から発生し、そこから黒い物体がもがいて出てこようとしている。まるで閉じ込められたサルが出口を見つけ、其処から出ようとしているかのように、欲にまみれた様な凄まじい動きで。

「こいつがデーモン。危険度？の特殊生物じゃ！スタンダードな生き物だからと言ってナメる事はできん。ゴリラの四倍は強いぞ！！」

ガルフの警告で過半数の生徒は慄き、腰を抜かしたままガルフ……いや、亀裂から避けていく。

《アグイアアアアアアアア！！》

瞳孔が開いたような亀裂から、牛と人骨を混ぜたような生き物が顔を出し発狂しながらノゾノゾと這い出てくる。上半身が完全に亀裂から出た時、勢いよく黒い生物は瞳孔から全ての体を地上に出した。

ドッシンッ！デーモンが芝に着地する。それと同時に、亀裂は傷が素早く癒えるかのように消えていき、数秒も経たぬうちに無くなった。

ガルフは特に表情を変えないまま、むしろ子供を見るかのように目の前の生物を一瞥する。三メートル弱はある体。獰猛な牙や爪。人体では到底敵わない強靱な肉体。闇に染まったような黒。この世の生物には思えない其れを、悲しむような表情で見つめた。

「……我が生徒達よ。この生き物を目に焼き付ける！これが、ゲスな人物が魔法の失敗により生み出した生物じゃ！こやつ等は自己を愛することができぬ。ただ破壊の感情に生まれた哀れな生命体であ

る！！」

ガルフの大声に反応するかのよう、禍々しいデーモンは全身に力を入れ込む。

《グオオオオオオオオ！！！！》

瞬間。

バサン！ 鳥が羽ばたく音が鳴り、デーモンの肩甲骨から黒い羽が生まれた。一度羽ばたき、今にも襲いそうな目でガルフを睨む。

「魔術が使えること、魔法が使えること、おぬし等は其れを誇りに思ってはならない！自己嫌悪して生きていくと誓え！誓えぬものはこの学校から去れ！これが魔術である！人類の恥となる、魔法であるッ！！！！」

《ギユアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！》

ダンッ！！ デーモンが地面を踏みにじり、勢いよく右手を伸ばしてガルフに鋭い爪の矛先を向ける。

その姿を見ても、何処か恐怖の感情が抱けない。悲しげな、人になれなかった人間を見ているような、今ここに生まれてしまった事をなじっているように見え、同情を呼んでいく。

全ては、人間が悪いのだ。弱い人間が、其れを作ってしまったのだ。

作ったから、使わざるを得ない。大人たちは、自己嫌悪をしながら生きている。

「クズが作ってしまったから、負の感情を用いねば使えない。それが魔法。憧れでも神でもない。ただの犯罪の道具。生徒達よ、外にはデーモンのような生き物ばかりがいる。生きなければ魔法を嫌え、自己を憎め。さすれば与えられる……これが、」

《ギユオオオオオオ！！！！》

デーモンの手が、ガルフに触れる瞬間。

「ルック」

《ガ、、》

ゴウウ！ ガルフの一言で、デーモンは軽々しく火の粉となり、

虚空へ散った。

「これが、魔法じゃ」

これが、これこそが、全ての人物が嫌う「魔法」。

科学の原理を応用して弱いものが生んだソレで、世界は回り続けている。

これはそんな大きな世界での小さな物語。

「話」魔法は捻くれ者が生み出したゲスな超常現象である」（後書き）

始めまして！ じゃない人が増えるといいなあ。

か細い毛糸です。

2作品目の連載モノ投稿、またもやファンタジー。

負の感情を肥大させることで、魔法というモノが出る。こんな馬鹿らしいアイデアは低知能な僕しかしませんよね。もっと力をつけて、しっかりとした作品を作っていきたいです。

それでは、有難う御座いました。

「二話「消えて終わる物語、そこから始まる物語」

空が血の色に染まり、茜色の夕日は見違えるほど明るく感じてしまふ。水平線まで続く砂漠のような荒れた地。地面は枯れて緑が無いというのに、気温は肌寒く肌になつとりと絡みつく湿気とにごつた空気は、景色と全く比例しない。例えるなら、環境が死んだような世界だった。

そんな場に、二人の男女がボロボロになりながらも地に足をつけていた。

「なんだよ、これ……、」

現在置かれている状況が把握できない年齢十三の少年リアンが、意味深な表情で呟いた。適度に伸ばした髪の毛と茶色のジーンズに紺のコートを羽織り、現代的ファッションを交えた魔法使いのような服装をしている。そのコートがボロボロなのは言うまでも無く、発する声は酷く枯れていて、左手の剣を握る手は汗でじっとり濡れている。

「はあ、りっ、リアンッ!!」

リアンの隣にいた少女ローリィは、驚愕の表情でそう尋ねた。伸ばした翡翠銀の髪とは違い、その服装はリアンと同じくらい傷ついている。

そんな二人の目の前には

《アひゃッ?》

「判猿……だつて?」

彼らの数メートル先。大危険生物の証であるレベル?の生き物が、悪の表情で笑っていた。身長や体格は一メートルの猿と瓜二つだが、その背中に生えた黒い羽、先が尖った尻尾、異常に伸びた八重歯は悪魔そのものだ。いや、絵に描いた悪魔と大差がない。

「わ、私の探る魔法で弱点を」

「馬鹿言うな!レベル?のデーモンで精一杯なのにソレより強い判

猿を倒せるわけが無いッ！！！」

「じゃ、じゃあどうするって言うの！？この荒地に逃げ道がある！？」

「く、くそ……」

手に汗を握ったまま、リアンは奥歯を噛んだ。平和というものを喉から手が出るほど欲しがる彼に、仲間のピンチであるこの状況は苦痛そのもので、一秒が何分にも感じるような感覚に苛まれている。逆に言えば、それだけの感情しか抱いてない。科学的魔法が発達した今現代ではこの様な奇怪生物は普通に存在しているので驚いたりしない。さらにはリアンは仲間であるローリーを守ることだけ第一に考えているため、自分の身を捨てているから恐怖がない。

赤い空の中、ローリーはゆっくりと口を開く。

「……リ、リアン。私」

「おとりになるとか……そういう事言うんじゃないだろうな？」

リアンがローリーの発言を切って口を入れた。それと同時にローリーが黙り込み、リアンから判猿に視界を変える。悪魔の微笑が彼女の視野の中心に立ち、嫌悪の身震いが体を蝕んでいく。

ローリー、とリアンは言葉を紡ぐ。

「なんだか……さ。あれだよ。キミと旅するからには、こんなヤツ倒せなきゃいけないよな。レベル？でも精一杯で、二人で倒したとき喜び分かち合って、それだけで仲間を守れた気がしてた。まあ殆どキミの魔法で倒せてたけど……。そんなの気にせず生きてきた」

「リ、リアン？」

「恥ずかしい……。僕は、今この場で何もできないのが、恥ずかしいッ……！」

ザクンッ！ 剣を荒れた地面に突き刺し、柄尻に右手を添えた。

「リアン、どうし」

「……る」

「え？」

「逃げる、ローリイ」

「ッ！ど、どうして」

「一緒に行けなくて、ごめん……。ルック」

瞬間。

パチンツ！一言と同時に、ローリイの姿は消えた。

一人の少年が最終手段として取った、瞬間的移動の魔法。

それだけがローリイを救い、きっと彼女は平和な町に飛ばされて
いるだろう。そう確信した彼は、何一つ恐れを持っていない。

「ははは。これで仲間、救えたかな……」

ただ達成感と罪悪感、こうなってしまった後悔だけが心に残る。

後は空っぽ、何も残っていなかった。戦う気力は勿論。逃げようと
する力さえも。

《ブヒヤあ？》

目の前には不適に笑う汚いサル。

これらを生んだのは、魔法だ。

彼は、生まれて初めての感情を抱く。

「魔法が……。憎いッ！」

《ギャビイイイイ！！！！》

グシヤリ。

空と同じ色のモノが、枯れた地面を潤していく。

魔法を三年間学ぶ公開型リースクールの中には「特待生」が混
じっている場合がある。

特待生として選ばれた生徒は通常の人たちと一緒に公開授業を受けて魔法を学ぶが、五時間目終了の後に居残りの授業がある。そこで特殊カリキュラムとして公開授業よりも強い魔法を学習する事になる。尚、その劣等優越による差別として反乱が起こる危険性があるため、卒業するまでは特待生という立場を隠さなければいけない。

さて。そんな魔法学校だが、特待生として卒業した人物は必ず旅に出る必要がある。服や武器に金と青で出来た、特待卒業生のシンボルマークである刺繍をつけ、その身分証明をつけた状態で五年間パートナーと旅に出るのだ。その理由は見かけ上魔法の深層心理を学ぶ事であるが、実際は外にいる危険生物の撲滅運動である。

特待卒業生はレジエンスと呼ばれ、昔からレジエンスというものは慕われている。故にその服や武器に着いている金と青の刺繍は、誇れる高貴なものなのだ。

現代社会に有効活用されているのは、魔法が殆どである。五千年前は機械が有効的に使われていたが、ある日を境に世界が絶滅し、魔法というものが出来たらしい。それ以来は車という環境破壊の走行ロボットなど不要になり、水など酸素と水素を化合させる魔法によって作成されるので、環境に害の無い世界が成り立っている。

「だけでもさー、魔法が出来たせいで奇妙な生き物生まれちゃっただろ？しかも、昔のビルとか言う長い建物無くなっただし！あれカツコよかったのにー！」

「そうだけど……って、それは魔法苦手なアンタの言い訳でしょ！？」

満遍なく広がる青空に見守られた町。その道脇で、二人の男女ラオとソフィアが大声で話し合っていた。土の建物と建物の間にある隙間で口論をする二人、ラオはジーンズにコート。ソフィアはミニスカートにカーディガンを羽織っていた。

「まっ、魔法なんて必要ないさ！俺には魔法より武術がある！」

「魔法使えないから武術に走っただんでしょ！？本当、武器捌きだけ

んまりそう言うの分からないんだよな」

「そうね……これから旅することになるのに、経験不足過ぎるわ。あの無意味に大きな魔法学校は無駄な勉強ばかりで全然実戦なし。そのくせ決められたパートナーと旅に出るとか、どう言う神経してるのかしら」

ソフィアはそう言うと、壁に背中を預けたまま足を交差させる。

太ももに杖を仕舞い込むと、その柄に金と青の刺繍が埋め込まれているのが分かった。よく見ればひざ上までのニーハイやカーディガンの胸ポケット付近にもその刺繍が入っていた。

「え、お前勉強してたの？俺剣振り回してただけだよ」

「はあ！？あ、アンタ、よくソレで特待卒業できたわね……。全国の特待希望落とされた人に平伏せても許されないわよ！」

新生物を発見した少年のように奇妙な表情でソフィアが一括、ソレに対してラオはペコリとお辞儀する。

「いや、うん。すみません！」

「壁に大声で謝らないで変な人だと思われるわ」

「すみません」

「声小さくしても変わらないから！」

二人で息の合った漫才をし、少しの沈黙が流れる。それに耐え切れなくなったのが、ラオは適度に伸びた髪をクシャクシャと掻く。

「ソフィア」

「なっ、なによ！」

背筋をビクつと震えさせ、不意を突かれた表情でソフィアが言う。

「これからよろしくな、パートナーさん！」

視線をラオに向ければ、そこには万遍の笑顔があった。

「……よろしくっ」

こうしてレジエンス内の二人は、ゆつくりと先へ進んでいく。明るい少年と素直じゃない少女の物語は時を刻み、静かに待ち受ける者へと近づいていく。

「二話」消えて終わる物語、そこから始まる物語」（後書き）

ご愛読有難う御座います。
か細い毛糸です。

今回、2種類の主人公を出しました。
ラオとソフィア、二人の物語を中心にやっけていくつもりです。
それでは、有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2305s/>

ゲスな魔法の使い方

2011年4月6日21時11分発行